

南方熊楠 秘魯國に漂著せる日本人

「やぶちゃん注：初出は大正元（一九一二年）十月発行の『人類學雜誌』第二十八卷十号で、初出は「[\[Stage\]のいちやうで](#)」原雑誌のそれを読むことが出来る。底本は[国立国会図書館デジタルコレクションのこちら](#)からである。これは「南方隨筆」の先の論文などが載る『東京人類學雜誌』が正しいのではないかと思われる方がいるかも知れぬので言っておくと、『東京人類學雜誌』は明治四四（一九一一年）年に会誌名を『人類學雜誌』と改めており、編集方針も大きく変わっていた。

注は段落の後に附したものは前後を一行空けた。」

秘魯國に漂著せる日本人

英譯 Ratzel, 'The History of Mankind', 1896, vol. i, p. 164 に、東西南半球間過去の交通を論じ、「日本と支那より西北亞米利加に漂著せる人あり。又米國の貨品が布哇に漂著せる例あり。然れども南半球に至りては、高緯度に有て風と潮流が西より南米大陸に向ひ、赤道近くに隨ひ、風潮並びに南米より東方に赴き去り、凡て東半球と南米間に人類の彼此往來ありし確證實例なし。たゞ民俗相似の點多きより推して、曾て斯る交通有たるを知るのみ」と述たり。

「やぶちゃん注：「Ratzel, 'The History of Mankind', 1896, vol. i, p. 164」ドイツの地理学者・生物学者フリードリヒ・ラッツェル (Friedrich Ratzel 一八四四年～一九〇四年：当時、隆盛であった社会的ダーウィニズムの影響の強い思想を特徴とし、政治地理学の祖でもある) の「民族学」(Völkerkunde：全三卷。一八八五年)の第一卷の英訳本。[当該英訳原本をInternet archiveで読め、当該箇所はこちら\(左ページ\)](#)である。

「布哇」ハワイ。」

以下の段落は底本では全体が一字下げである。」

未開の民が、風と潮流に逆うて弘まり行きし例あるは、第二板「[エンサイクロペディア・ブリタニカ](#)」卷二十二、三四頁に、多島海人、古へ航海に長じ、其邊の風と潮流主として東よりすれども、時に西よりする事有るを利用し、印度洋島より發程して、遂に遠く多島海諸島に移住せる由を言へり。Daniel Wilson, 'Prehistoric Man', 1862, ch. vi & xxv. に、南太平洋に太古今よりも遙かに島數多かりしが、漸々海底に沈みし由を論じ、多島海人が往昔航海術に長ぜる記述に及ぼし、人間が東半球より西半球に弘まりしは、第一に多島海より南米に移りて秘魯中米等の開化を建立し、第二に大西洋を経て西印度中米「ブラジル」等に及ぼし、第三に「ベーリング」海峡及び北太平洋諸島より北米に入りし者の如しと説きたり。

「やぶちゃん注：『[エンサイクロペディア・ブリタニカ](#)」卷二十二、三四頁』一七六八年に

初版が発行された英語で書かれた百科事典「ブリタニカ百科事典」(表記はラテン語で‘*Encyclopædia Britannica*’)。第二版はスコットランドの著述家、航空のパイオニアであったジェームズ・タイラー (James Tytler 一七四五年～一八〇四年) の編集になり、一七七七年から一七八四年にかけて刊行された。これもやはり、[‘Internet archive’のところで当該部分\(左ページ\)](#)が読める。

「多島海人」ポリネシア人。

「Daniel Wilson, ‘Prehistoric Man,’ 1862, ch. vi & xxv.」スコットランド生まれのカナダの考古学者・民族学者・作家ダニエル・ウィルソン(一八一六年～一八九二年)の「先史時代の人間」。一八六二年刊。原本は、やはり[‘Internet archive’のこちらで読める](#)。

以下、本文位置へ戻る。」

今東半球の赤道以北よりすら、嘗て南米に漂著せる人の絶無ならざるを證する爲に、予の日記の一節を略ぼ原文の儘寫し出す事次の如し。

明治二十六年七月十一日夕、龍動市「クラバム」區「トレマドク」街二十八番館主美津田瀧次郎氏を訪ふ。此月六日、皇太孫「ジョールジ」(現在位英皇)の婚儀行列を見ん^み^つた、「ビシヨプスゲイト」街、横濱正金銀行支店に往し時相識と成し也。此人武州の産、四十餘歳、壮快なる氣質、足藝を業とし、毎度水晶宮等にて演じ、今は活計豊足すと見ゆ。近日西班牙に赴き興行の後歸朝すべしと云ふ。子二人、實子は既に歸朝、養子のみ留り在り、其人日本料理を調べ饗せらる。主人明治四年十一月本邦出立支那印度等に旅する事數年、歸朝して三年間京濱間に興行し、再び北米を経て歐洲各國より英國に來り、三年前より今の家に住すと云々。旅行中見聞の種々の奇談を聞く。西印度諸島等の事、大抵予が三四年前親く見し所に合ひ、氏秘魯國に住しは明治八年十二月にて、六週間計り留りし内奇事有り。平田某次郎と云ふ人、七十餘歳と見え、其甥三十餘と見えたり。此老人字は書けども、本朝の言語多く忘却しぬ。美津田氏一行本邦人十四人有て、毎日話し相手に成し故、後には九分迄本邦の語を能する「やぶちゃん注」に「よくする」に及び、此物彼品を日本にて何と語りや忤問たり。兵庫邊の海にて、風に遭ひ漂流しつ。卅一人乗たる船中三人死し、他は安全にて秘魯に著せり。甥なる男當時十一歳なりし。

「やぶちゃん注」：「明治二十六年」一八九三年。南方熊楠は明治一九(一八八六)年十二月二十二日に横浜港より渡米し(満十九歳)、六年後の一八九二(明治二十五)年九月にイギリスに渡った。この年には科学雑誌『ネイチャー』(NATURE)十月五日号に初めて論文‘*The Constellations of the Far East*’ (「極東の星座」)を、同十月十二日号には‘*Early Chinese Observations on Colour Adaptations*’ (「動物の保護色に関する中国人による先駆的觀察」)を寄稿している。

「龍動」ロンドン」。

『「クラバム」區』Clapham。クラバム。南ロンドンの広域地区名。

「トレマドク」底本は「トレマドリ」。初出で訂した。Trenadoc。 [ここ](#) (グーグル・マップ・データ。以下同じ)に「トレマドック通り」がある。

「美津田（みつた）瀧次郎」ルビはママ。初出及び「選集」は「みつた」であり、「南方熊楠履歴書（その5） ロンドンにて（1）」（私の五年前の電子化注）でも「みつた」とルビするので特異的に訂した。そこで私は美津田瀧次郎（嘉永二（一八四九）年？（？）は足芸（あしげい）・仰向いて寝て挙げた足だけで樽や盃などを回したりする曲芸）を得意としたサーカス芸人で、「南方熊楠コレクション」（河出文庫）の注によれば、南方熊楠の明治二六（一八九三）年『七月の日記に「美津田滝次郎を訪、色々の奇談をきく」とあるように、しばしば親交を結んだという注した後、本篇のこの前後を初出で電子化している。

『皇太孫「ジョージ」』（現在位英皇）後のウィンザー朝初代君主イギリス国王ジョージV世（George V 全名：ジョージ・フレデリック・アーネスト・アルバート：George Frederick Ernest Albert 一八六五年～一九三六年）。一八九三年七月六日にメアリー・オブ・テック（Mary of Teck 一八六七年～一九五三年：現女王エリザベスII世の祖母）と結婚した。

「ビショップスゲイト」Bishopsgate。ロンドンのビショップスゲイト地区。この通り。

「横濱正金」（しやうかね（しょうかね））「銀行支店」明治一三（一八八〇）年に「国立銀行条例」に基づいて設立された貿易金融専門銀行。資本金三百万円の三分の一は政府の出資。明治三〇（一八九七）年には「横浜正金銀行条例」により特殊銀行に改組され、「日露戦争」以後、満蒙で植民地銀行の役割も果たした。世界各地に支店を置き、昭和に入って政府の為替統制機関となった。ロンドン支店は明治一六（一八八四）年十二月一日開業。

「水晶宮」The Crystal Palace。原型は一八五一年にロンドンのハイド・パークで開かれた「第一回万国博覧会」の会場として建てられた建造物。造園家・建築家であったジョセフ・パクストン（Joseph Paxton 一八〇三年～一八六五年）の設計になり、鉄骨とガラスで作られた巨大な建物で、プレハブ建築物の先駆ともされる。パクストンの設計では長さ約五百六十三メートル、幅約百二十四メートルであった（「水晶宮」という名称はイギリスの雑誌『パンチ』（PUNCH）御用達の投稿者であった劇作家で作家のダグラス・ウィリアム・ジェロルド（Douglas William Jerrold）が名づけた）。参考にしたウィキの「水晶宮」によれば、『万博終了後は一度解体されたものの』、一八五四年には『ロンドン南郊シデナムの丘において、さらに大きなスケールで再建され、ウィンター・ガーデン、コンサート・ホール、植物園、博物館、美術館、催事場などが入居した複合施設となり、多くの来客を集めていた』。しかし、一八七〇『年代頃から人気に陰りが見え始め』、一九〇九『年に破産し』、『その後は政府に買い取られ、第一次世界大戦中に軍隊の施設として利用され、戦後』に『一般公開が再開されたが』、一九三六年十一月に『火事で全焼して』再建されなかったとある。

「活計豊足す」「かつけいほうそくす」。生活は満ち足りている。

「明治四年十一月」本邦では明治五年十二月二日（一八七二年十二月三十一日）まで太陰太陽暦（旧暦）を採用していたため、西暦とはズレが生じる。熊楠が換算している可能性は限りなく低いから、この月は旧暦十二月一日はグレゴリオ暦では一八七一年十二月十二日で、晦日（この年は小の月で十一月二十九日）は一八七二年一月九日である。

「平田某次郎」「某」はママ。こんな名は聴いたことがない。熊楠は正確な名をその場では聴いたが、覚えていなかったから、かく記したものかも知れない。」

其後他は盡く歿し、二人のみ残り、老人は政府より給助され、銀行に預金して暮し、甥は可なり奇麗なる古着商を営み居れりと。老人も、以前は手工を営みし由、健全長壽の相有て、西班牙人を妻れりと「やぶちゃん注…「めとれりと」」。其乗來りし船は、美津田氏一行が著せし三年前迄、公園に由來を記して列し有りしが、遂に朽失せぬ。美津田氏一行出立に臨み、釀金して彼人に與へ、且つ手書して履歷を記せしめ、後桑港「やぶちゃん注…「サンフランシスコ」」に著するに及び、領事館へ出せしに、秘魯政府に照會の上送還せしむべしと也。以後の事を聞き及ばずと云ふ。一行「リマ」市を立ち離るゝ時、老人も送り來り、名殘惜げに手巾を振り廻し居りしと、美津田氏ら桑港に著せし時、在留の邦人纔に三人、領事柳谷と云ふ人親ら「やぶちゃん注…「みづから」」。旅館へ來訪されたり云々。

「やぶちゃん注…「釀金」「きよきん（きよきん）」。ある目的のために金を出し合うこと。

「領事柳谷」在サンフランシスコ日本領事館の開設は明治三（一八七〇）年の秋で、明治九（一八七六）年に最初の日本人領事柳谷謙太郎が着任している（その間はアメリカ人が代理を務めた。以上は「在サンフランシスコ日本国総領事館」公式サイト内の歴史記載に拠った）。以下の一段落は、底本では全体が一字半下げでポイント落ち。」

美津田氏は、質直不文の人なれど「やぶちゃん注…「ど」は底本は「ば」であるが、初出で訂した。」、假名付の小説を能く讀みたり、其談話は一に記憶より出し故に、誤謬も多少有るべきと同時に、虚構潤色を加ふること無しと知らる。又予が日記には書かざれど、確かに美津田氏の言として覺ゆるは、件の老人に歸國を勧めしに、最初中々承引せず。吾等既に牛肉を食ひたれば身穢れたり。日本に歸るべきに非ずと言ひしとか。

「やぶちゃん注…「質直」「しつちよく（しつちよく）」は地味で真面目なさま。質朴。

「不文」正規の日本の教育を殆んど受けていないということ。

「吾等既に牛肉を食ひたれば身穢れたり。日本に歸るべきに非ず」平田老人のこの言葉、何か私は頭が下がる思いがする。

以下、本文に戻る。」

件の美津田氏は、その後二子（共に養子也。日記右の文に一人は實子とせるは謬り也。）俱に違背して重き家累を生じ、自ら「やぶちゃん注…「おのづから」」。歸朝するを得ず。更に「もと」と名づくる一女（邦人と英婦の間種、芳紀十五六、中々の美人也）を養ひ、龍動に二三年留り居「やぶちゃん注…「をり」」。予も一二回訪しが、其後の事を知らず。右の日記に書留めたる外にも、種々平田父子の事を聞きたるも、予只今記憶悪く成て、一筆を留めざるは遺憾甚し。近頃柳田國男氏に問合せしに、柳谷謙太郎氏明治九年十月九日より十六年三月三十一日迄、桑港領事として留任せりと答へらる。因て考るに、美津田氏一行、九年正月「リマ」を出立し、諸方を興行し廻り、其年十月後桑港に著きたるならん。「ブラジル」「アルゼンチン」等に到りし話も聞きたれば、斯く思はるゝ也。

「やぶちゃん注」南方熊楠は事実関係をしっかり確認している。

「家累」（かるい）は家族内の悩み事。「違背」とあるから、犯罪に近い非行を働いてしまったものか。」

序に述べ、右の日記二十六年七月二十二日の條に「美津田氏宅にて玉村仲吉ちゆうきちに面會す。埼玉縣邊「やぶちゃん注」「あたり」の人。少時足藝師の子分と成り、外遊中病で置去られ、阿弗利加沿岸の地諸所多く流寓、十七年の間、或は金剛石「やぶちゃん注」「ダイヤモンド」坑に働き、又「ペンキ」塗り杯を業とせし由、「ズールー」の戦争に英軍に従ひ出で、賞牌三つ計り受用すと。予も其一を見たり。白蟻の大窠等の世話さる。日本語全く忘れしを、近頃日本人と往復し、少しく話す様に成れりと。龍動の西南區に英人を妻とし棲み二年有りと也」と有り。所謂「ズールー」の戦争は、明治十二年の事にて、「ナポレオン」三世の唯一子、廿三歳にて此軍中蠻民に襲はれ犬死せり。當時從軍の玉村氏廿歳計りの事と察せらる。日本人が早く南阿の軍に加はり、多少の功有りしも珍しければ附記す。明治二十四年頃、予西印度に在りし時京都の長谷川長次郎とて、十七八歳の足藝師、肺病にて「ジャマイカ」島の病院にて單身呻吟し居たりし。斯る事猶ほ多からん。

（大正元年十月人類二八卷）

「やぶちゃん注」「仲吉ちゆうきち」歴史的仮名遣は「ちゆうきち」でよい。

「金剛石」ダイヤモンド。

『「ズールー」の戦争』英語『Anglo-Zulu War』は一八七九年にイギリス帝国と南部アフリカのズールー王国（インド洋の沿岸部に十九世紀に南アフリカ東海岸部に建国された君主国。十九世紀初め、ズールー族の王となったシャカが軍事組織と武器を改革し、周辺の部族を次々と統合して、一八二四年にはポート・ナタール（現在のダーバン）のイギリス人入植者と友好関係を結んで、鉄砲を入手し、それを使って、さらに王国の版図を広げた。一八二八年には異母弟のディンガネがシャカを殺して王位に就き、さらに領土の拡大を図った）との間で戦われた戦争。この戦争は幾つかの血生臭い戦闘と、南アフリカに於ける植民地支配の画期となったことで知られる。イギリス植民地当局の思惑により、本国政府の意向から離れて開戦したものの、英国軍は緒戦の「イサンドルワナの戦い」で、槍と盾が主兵装で火器を殆んど持たなかったズールー軍に大敗を喫し、思わぬ苦戦を強いられた。その後、帝国各地から大規模な増援部隊が送り込まれ、「ウルンデイの戦い」で近代兵器を用いたイギリス軍が王都ウルンデイを陥落させ、勝利し、ズールー国家の独立は失われた（以上はウィキの「ズールー戦争」に拠った）。

「大窠」（だいくわ（だいか））は大きな巣のこと。

『「ナポレオン」三世の唯一子』父ナポレオン三世の嫡出子でフランス第二帝政時代の皇太子ナポレオン・ウジェーヌ・ルイ・ボナパルト（Napoléon Eugène Louis Bonaparte 一八五六年～一八七九年）。父ナポレオン三世に溺愛されたという。「普仏」戦争の初期、フランス軍が各地で劣勢となり、ナポレオン三世は捕虜となり、一八七〇年九月二日から四日までの二日間だけ、彼が表面上の政務を取り仕切ったが、その四日、パリで民衆の暴動が起こり、九

月六日にイギリスへ亡命した。イギリスでは砲兵学校に入学し、好成績で卒業、ヴィクトリア女王に愛称の「ルル」で呼ばれて寵愛され、未婚のアトリス王女との縁談も持ち上がるほどであった。イギリスへの恩返しとして「ズールー戦争」に従軍、ズールー族の襲撃を受けて戦死した。子はなく、ナポレオンⅢ世の直系は絶えた（以上は彼のウィキに拠った）。

「明治二十四年」一九〇一年。

「長谷川長次郎」詳細事績不詳。」